



ASLE-Japan / 文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

December 15, 2009, No. 27

【役員名簿 (2008-2010)】

代表: 村上清敏 (金沢大学)
 副代表: 喜納育江 (琉球大学)
 顧問: 伊藤詔子 (広島大学名誉教授)
 上遠恵子 西村頼男 (阪南大学)
 事務局長: 小谷一明 (新潟県立大学)
 事務局補佐: 岩政伸治 (白百合女子大学)
 豊里真弓 (札幌大学)
 会計: 高橋綾子 (長岡技術科学大学)
 平塚博子 (敬和学園大学)
 監事: 上岡克己 (高知大学)
 ニュースレター編集委員:
 横田由理 (広島国際学院大学)
 木下卓 (愛媛大学)
 塩田弘 (広島修道大学)
 会誌編集委員:
 生田省悟 (金沢大学)
 高橋龍夫 (専修大学)
 中川僚子 (聖心女子大学)
 Daniel Bratton (同志社大学)
 結城正美 (金沢大学)
 コンピューターセンター:
 北国伸隆 (萩光塩学院)
 岩政伸治 (白百合女子大学)
 山城 新 (琉球大学)
 評議員: Bruce Allen (清泉女子大学)
 池田志郎 (熊本大学)
 石幡直樹 (東北大学)
 太田雅孝 (大東文化大学)
 茅野佳子 (明星大学)
 管啓次郎 (明治大学)
 高橋勤 (九州大学)
 高橋昌子 (三重大学)
 巽孝之 (慶応義塾大学)
 田中恒寿 (札幌大学)
 辻和彦 (近畿大学)
 吉田美津 (松山大学)
 院生代表: 山本洋平 (立教大学・院)
 広報: 三浦笙子 (東京海洋大学(名))
 大野美砂 (東京海洋大学)
 河野千絵 (日本大学 (非))
 研究助成:
 岡島成行 (日本環境フォーラム)
 高田賢一 (青山学院大学)
 乳井昌史 (早稲田大学)
 山里勝己 (琉球大学)
 野田研一 (立教大学)
 村上清敏 (代表)
 喜納育江 (副代表)

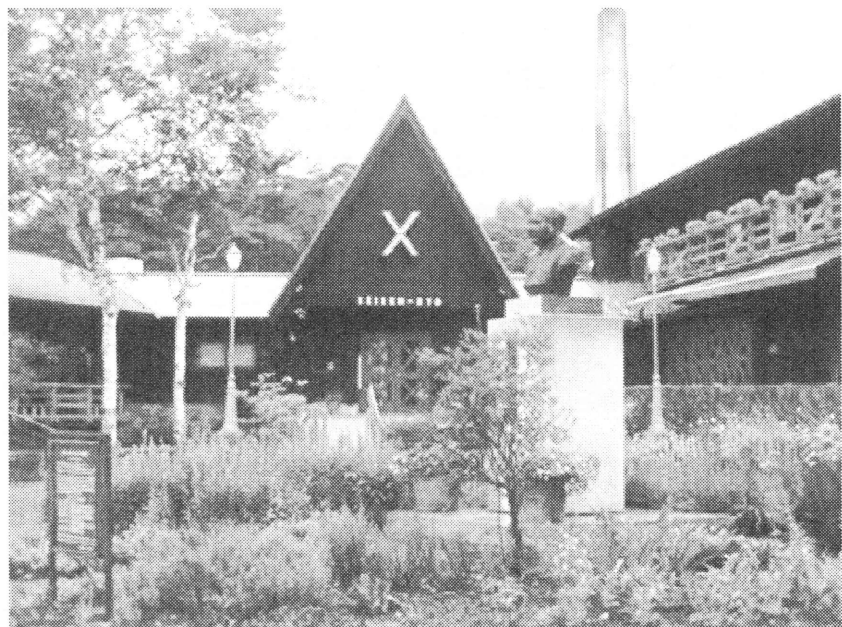
清里大会雑感

代表 村上 清敏 (金沢大学)

ニューズレター最新号は、清里での全国大会特集号の様相を呈するものと予想されるので、個々のイベントや発表についての詳細は、それぞれのレポーターにお任せすることにして、きわめて個人的な感想を書き連ねたいと思う。

まず嬉しかったのは、全体で60名を越える多くの参加者があったこと。過去の全国大会参加者数を記憶しているわけではないが、少なくとも近年まれに見る大盛況であったと思われる。しかも、長い長いおつきあいの会員と旧交を温めたばかりでなく、新規の会員の方々の知遇も得て、前号のニューズレターで述べた「妄言」が杞憂に過ぎないことを知った。

今回、院生組織の方々を中心とした目新しい試みが幾つかあったが、そのうちのひとつが一日日夜の懇親会兼「とっておきの一冊」という企画であった。アルコールが入って、気分が高揚したところで、日頃愛読する「とっておきの一冊」を紹介しようというコーナー。会



員のお人柄が彷彿とされる一冊、あるいは意外な側面を垣間見せてくれる一冊などなど、みなさんとても楽しそうに、ご自分の思いの丈を伝えようとなさっており、「文学の研究なんぞと云っていても、結局はここから始まらなくっちゃ……」との思いを強くした。一番駄目だったのが、ぼく自身で、日頃の不勉強を悟られまいとして、あるいは、代表としての面目を何とか保とうとして、David Gessner, *Sick of Nature*. Hanover, New Hampshire: Dartmouth College Press. 2004. などという、もっともらしい本を紹介した挙げ句、「ジョン・ヘイの翻訳に再挑戦してみたい」などと、言わずもがなのことまで口走って、座を白けさせてしまったのだった。

それとは対照的であったのが、立教の渡辺憲司さん。渡辺さんと言えば、江戸文学を中心とした日本文学の大家だが、その渡辺さんが紹介したのが、何と、円谷円、『中古カメラ屋通の本』小学館、2001年。何を隠そう、ぼく自身、これまで出張のたびに、鞆の隅に隠し持っていった一冊であった。ただし、ぼくの場合は、どんなに古いカメラでも完動品で実際に写真が写せなければ購入にまでは到らないが、渡辺先生の場合は、そうした凡百の迷いなんぞは突き抜けて、「写らなくても構わない」、「シャッター音を聴いているだけでたまらない」とまでおっしゃる。まさに、病膏肓に入るとはこのことかと思われるが、ぼくにとっては、こうした「溺愛」、「偏愛」こそが文学研究の核にあることを改めて思い知らされる貴重な証言であったし、修行が足りない我が身を自覚させられもしたのであった。

それにつけても思い出されるのは、二日目夜のイベント。一つはレラの会会長である長谷川修氏をお招きしてのワークショップ、「アイヌ民族に「環境正義」を」。長谷川氏の話はどれも重い内容を持った、聴衆の変革と行動を迫るものであったが、何よりも印象に残ったのは、一語一語言葉を選んで話そうとなさるその姿勢と、言葉と言葉の間の深い沈黙であった。自分自身の限られた経験を話せば、研究発表をおこなったりシンポジウムのパネリストを務める場合、まず考えるのは、限られた時間内で如何に淀みなく話すか、ということであり、いきおい、用意した原稿を棒読みしてしまうことにもなりかねない。最初の段階ではあった（と思いたい）はずの、「溺愛」も「偏愛」も、あるいは「思いの丈」も、どこかに吹き飛んでしまい、ただただ作法に則った、気の利いたタームをそこそこに散りばめた、お行儀の良い発表に終わってしまったことが思い返される。この夜もまた、まだまだ修行が足りない我が身を嘆くはめとなったのであった。

続いておこなわれた「交流会」という名の飲み会も、趣向が凝らされていて、それぞれが日頃疑問に思っている事項について、会員諸兄姉の教を請うという企画であった。ここで大活躍したのが、生田さんであり、野田さんであり、管さんであり、松岡さんだった。こうした「知の巨人」とも呼ぶべき方々が会を支えて下さっているかぎり、会の未来は明るいなどと思いながら、ぼく自身はと言えば、院生組織の方々が用意してくださった数々のつまみや、小谷事務局長からの差し入れである美味しいチーズを肴に、ビールやらワインやらチューハイやらに酔いつぶれてしまい、企画の後半は半睡状態であった。修練の未熟さに追い打ちを掛けての、己の無知にいたたまれなかったのである。

このように、今回の清里大会、個人的には反省と悔恨の日々であったのだが、学会としては、幾つもの大きな収穫があった。先にも述べたとおり、参加者が会員全体の三分の一近くに及んだこと、院生組



織の方々の大車輪の活躍があったこと、壮年の会員諸兄姉も、それぞれ曰く言い難い持ち味を發揮して下さったこと、今後も継続したい数々の新趣向があったこと、そして、松岡さんを中心とした「環境教育」に関する新しい芽が育ちつつあることなどである。最後になるが、野田大会実行委員長はじめ大会の運営にあたって下さった実行委員の皆様、お力添えを賜ったキープ協会の皆様、とてもタイトな日程に最後までおつきあいくださった、顧問の上遠恵子さんはじめ会員の皆様はこの場を借りて、篤く御礼申し上げたい。

8月29日から31日の間、山梨県清里(財団法人キープ協会 清泉寮本館)にてASLE-Japan/文学・環境学会第15回全国大会が開催された。ハルオ・シラネ氏の基調講演に始まり、会員による個別発表、ラウンドテーブル、ワークショップが開催された。活気にあふれた大会の模様を、それぞれのセッションごとに参加者に報告していただいた。(編集部)

ASLE-Japan 2009 年全国大会基調講演報告(コロンビア大学教授 ハルオ・シラネ)
“Japan and the Culture of the Four Seasons: Secondary Nature, Social Difference, and the Illusion of Harmony”「日本と四季の文化:二次的自然、社会的差異、調和という幻想」

高橋 綾子 (長岡技術科学大学)

10月13日の午前中に開かれた「東アジアパネル」(East-Asian Panel on Environmental Literature)は、日本、韓国、台湾、香港からの研究者による興味深いパネルであった。まず若松美智子氏は、“Ishimure Michiko’s Depiction of Industrial Pollution and Minamata Disease”で石牟礼道子の「苦海浄土」三部作である『苦海浄土』、『神々の村』そして『天の魚』をとりあげ、これらの三部作が水俣病を引き起こした企業の罪、そしてそれによって苦しむ人びとの悲劇、そして自然と共存した「極楽」世界への希求が描かれた作品として読みとく。『苦海浄土』では打ちひしがれた魂から発せられる言葉の中に「極楽」への願いを読みとき、そして『神々の村』と『天の海』では病に冒された人びとの受難者としての内面世界の深さを指摘する。石牟礼が苦しむ人びとの中にこの世の聖者を見出し、彼らこそが環境汚染の進む現代社会に対して人間の尊厳を示すことができると描出していると結論づける。

次に韓国のSungkyunkwan 大学のWon-Chung Kim氏は“Distopia and Toxic Discourse in Wonil Kim’s “Meditation on a Snipe”で、1979年に出版されたKimの中編小説といえる“Meditation on a Snipe”をとりあげ、なぜこの作品が韓国におけるエコロジカルな文学の先駆的作品と見なされているかを論じてゆく。Kim氏は、朝鮮半島の分断と環境汚染の相互関係についての研究が韓国における環境文学のひとつの特徴であるとし、Wonil Kimの“Meditation on a Snipe”に描かれる産業複合都市のディストピア的現実を都市開発による環境の劣化と一つの家族の分裂を通して描いていると指摘する。作品は韓国の近代化が孕む環境問題だけではなく、我々の持つ人間中心主義的な傲慢さと限りない欲望が孕む毒をも前景化していると読みとく。

次に台湾の国立中山大学のShiuh-huah Serena Chou氏は“Writing “Nature?”: A Study of Wu Ming-yi, Liao Hung-chi, and Nature Writing in Taiwan”で、1980年代の環境保護運動の隆盛と共に環境文学が誕生したことを指摘し、台湾に関する紀行文学を編集したLiu Ke-xiangや、The Society of Wildernessを設立したXu Ren-xiu、さらに台湾において初めてジャンルとしての「ネイチャーライティング」を定義した中国文学の教授Wu Ming-yiを紹介してゆく。中国語の“Huang-ye” (wilderness)や“Huan-jing” (environment)がアメリカの環境保護運動に影響を受けながら、台湾においてどのように新しい概念を取り込んでゆくのか興味深い発表であった。最後に、Hong Kong Baptist 大



学のChung Ling氏は“Land and Beings in Zhang Wei’s Fiction : A Case Study of Chinese Ecological Literature”で長江河口や黒竜江省、そして湖南省の地域についてエコロジカルなテーマで作品を発表している作家を紹介しながら、山東省の北部沿岸について書いているZhang Weiを論じる。Weiの*September Allegory*(1993)や*Song of Porcupine*(2007)にみられる自然と人との関係や環境劣化の問題を指摘する。

以上のように日本、韓国、そして中国からの研究者の発表は、それぞれの地域において文化的に異なる背景にありながら、開発と産業社会での人と環境の個別の問題が、グローバルな共通の問題としても捉えられることがよく理解できるパネルであった。このようにアジアからの研究者と共に、英語を共通語として文学と環境について研究成果を発表し、そして話し合えるパネルはたいへん有意義であった。東アジアの多くの環境文学が英語や日本で読める日が来ることを期待しつつ、これまでの交流をさらに深め、相互の研究活動を活発に進めていくことができればよいと思われた。

ラウンドテーブル1
**「ローカリティ・グローバリティ・プラネタリティ：
 環境文学研究における新たな場所論」**

佐々木 郁子 (近畿大学・非)

第15回全国大会の初日、ラウンドテーブル1「ローカリティ、グローバリティ、プラネタリティ：環境文学研究における新たな場所論」が、院生組織とMETAサークルのメンバーによる合同発表形式で行われた。エコクリティシズムでは、特定の場所との交渉から得られる「場所の感覚」に焦点が置かれがちだが、グローバリズムや帝国をめぐる議論が高まるなかで、ある場所が複数の場所との間に持つ関係性を考慮し、地球全体を視野に入れた「惑星的思考」を持つことも求められてきている。本ラウンドテーブルでは、そうした新しい場所論を扱う研究書が紹介され、アメリカ・イギリス・カナダ・日本の環境文学をとりあげたケーススタディが発表された。

まず、小谷一明氏(新潟県立大学)は「エコ・コスモポリタニズムとは何か——疑似自然への抵抗とグローバルな環境への想像力」で、本ラウンドテーブルのきっかけともなったUrsula K. Heiseの*Sense of Place and Sense of Planet: The Environmental Imagination of the Global*(2008)を紹介した。チェルノブイリを扱う文学作品や、アマゾンの森を題材とした映画についての論考を参照しながら、グローバリゼーションの下でローカルとの直接的なつながりが希薄になる「脱領土化」や、逆にメディアを介したつながりの回復、他の場所を思いやるグローバルな想像力について解説がなされた。

グローバリゼーションをめぐる議論では、移動性も重要なテーマとなる。山本洋平氏(立教大学・院)は「アメリカ環境文学における<巡礼>の系譜——ソローにおける場所の感覚と歴史感覚」で、近代における「巡礼」が、宗教的・儀式的な聖なる側面と娯乐的・観光産業的な俗なる側面を合わせ持つことに注目し、それはまたアメリカ環境文学の特徴でもあると指摘する。これに基づいて、Henry David Thoreauの*The Maine Woods*(1864)、“Walking”(1862)、*Walden*(1854)を再考し、Thoreauと場所との多様な関係性を示した。

司会を務めた巴山岳人氏(和歌山大学・非)は「「オーストラリアには血がまかれなければならない」——D・H・ロレンス『カンガルー』における場所の政治学」で、第一次大戦後のオーストラリアを舞台にしたD. H. Lawrenceの*Kangaroo*(1923)をとりあげた。英国の帝国主義などによる初期グローバリズムと、ナショナリズムやネイティヴィズムに基づいたローカリズムとの対立構図のみならず、ネイティヴィズムを本質化することに対する慎重さや、ローカルな場所に共感を持ちながらも、複数の場所の関

係性の中にあるとするとトランスナショナルな姿勢も読み取れることを指摘した。

森田系太郎氏（立教大学・院）は、「〈場所〉の保有は特権か？——詩人 Caffyn Kelly と〈場所〉を持たない者としてのクィア」で、クィアエコロジーやクィアエコフェミニズムの誕生経緯を紹介し、カナダ人詩人 Caffyn Kelly の“Space” (2005) をとりあげた。詩人の“To be homosexual is to have no space”という言葉を参照しながら、場所の保有の特権性や、クィアなどのマイノリティが場所を持たないことについて問題提起を行った。

最後に、グローバリズムとローカリズムの交渉関係を、池澤夏樹の『すばらしい新世界』(2000) に読み取ったのが、結城正美氏（金沢大学）の「〈田舎の復権〉——場所とグローバリズムをめぐる文学的想像力」である。日本人主人公が、ネパール奥地での生活を通して、東京の生活を見直す過程には、田舎への同化ではなく、都市型生活を内省する定点として田舎を位置づけるという多元主義的な姿勢や、自らの属性を問い直す姿勢が見られると指摘された。フロアからは、Thoreau とマージナルな場所との関わり、クィアエコロジー、そしてクィアが場所を持たないことについて質問があり、活発な議論が知的刺激に満ちた時間を締めくくった。

ナイトハイク報告

山田 悠介（立教大・院）

山梨県は清里で開催された 2009 年度 ASLE-Japan 全国大会では、ふたつの自然体験プログラムが行われました。ここでは、一日目の夜に行われた、清里の夜の森を散策する「ナイトハイク」についてご報告します。

夕闇に包まれる夜 7 時過ぎ、森のガイドであるキープ協会のインタープリターの方を先頭に、夜の森へと出発しました。参加者が 30 名近くに上ったため、清泉寮の入口で二つのグループに別れました。

清泉寮を出て森へと続く道をゆくと、徐々に明かりが消えてゆきます。夕方から降る小雨が頬を濡らす感触、レインコートに当たる音、参加者たちの立てる足音、草や木の匂い。暗闇の方へ、森の方へと進むうちに、視覚以外の五感が世界に開かれていくのが分かります。

いよいよ、森の中へ。雨で少しぬかるんだ地面に気をつけながら、一列になって森の斜面を登っていきます。目が慣れてきたとは言え、目の前は深い闇に包まれているため、木の根や石を手探りならぬ「足探り」で一歩一歩進まなければなりません。時折、前や後ろで悲鳴が聞こえることも……。転ばないように神経を集中させながらしばらく進み、少しひらけたスペースに到着。グループで輪になり、インタープリターの方から、ヤマネや鹿、タヌキやフクロウなど、清里の森に住む動物たちについて、絵を見ながら説明をしていただきました。

ここで、出発時に配られた毛布を敷いて、一人になる時間へ。思い思いの場所に毛布を敷き、寝転がったり座ったりしながら、森の静寂を楽しみました。濃密な闇のなかにもかかわらず、空の微かな明かりは思いがけずはっきりと見え、曇り空に、木の一本一本、枝の一つ一つがくっきりと浮かび上がっていました。自分の座っている土の感触を味わいながら、しばし時を忘れて過ごすうちに、集合を知らせる鈴の音が聞こえ、再び輪に。何十分も座っていたような感覚でしたが、実際には 7, 8 分しか経っていなかったとのこと、他の参加者の方も口々に、「もっと長いと思った」と仰っていたのが印象的でした。

普段はなかなか体験することのできない、夜の森と明かりのない世界。ナイトハイクは、夜でも当た

り前のように光を使う私たちが、ふと忘れてしまっているような感覚を思い出させてくれるものでした。二日目に行われた自然体験プログラムとともに、清里の自然を満喫できた、大変楽しい時間でした。企画、運営にご尽力くださった野田先生、そして、キープ協会のインタープリターの方々に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

研究発表 1

・「なぜそれは、例えば「空」なのか? :マンガの「間」の特殊性とそこに描かれる自然についての一考察」

・“Goddesses, Whores, Hags and Maidens: Images of Female Nature in Contemporary Women Sculptors and Land Artists”

研究発表 2

・「見えない視線を暴くとき: *All the Powerful Invisible Things* における境界線と選択」

・「雑誌『人間家族』が遺したもの、そしてこれから」

巴山 岳人 (和歌山大学・非)

2009年度全国大会第二日目(8月30日)の午前の部では、4つの研究発表が行われた。それぞれのテーマはマンガから、パフォーマンス・アート、文学作品研究、そして雑誌メディアへと、大変幅広くまた興味深い内容が論じられた。

はじめに中村優子氏(立教大学・院)が「なぜそれは、例えば「空」なのか? :マンガの「間」の特殊性とそこに描かれる自然についての一考察」と題し、日本の「マンガ」作品についての報告を行った。中村氏によれば諸外国のいわゆる「コミックス」と比べると、日本の「マンガ」は物語の流れとは無関係なコマが挿入されることを一つの特徴としているという。そこには日本における他の芸術作品にも類似した「間」の存在を確認することができるが、特に「マンガ」の「間」においては、しばしば空や光、そして花といった自然物が描かれている。中村氏はこうした自然物が描かれた「間」のコマの機能を、ネイチャーライティング研究における「交感」の概念に依拠しながら分析を行った。「交感」は人間の感情と外部の自然環境との一種の対応関係を意味すると考えられるものであり、一見作品の筋展開とは関係のない「間」のコマも、実は登場人物の心情の動きや流れを効果的に示す「交感」のコマとして捉えることができるのである。

次にDaniela Kato氏(東京工業大学)が“Goddesses, Whores, Hags and Maidens: Images of Female Nature in Contemporary Women Sculptors and Land Artists”として、女性の身体と自然とをテーマとしたパフォーマンス・アートについて考察した。批評家のCamille Pagliaは、「自然対文化」という家父長制的枠組みを温存するに過ぎない構築主義に対して、女性の身体に潜む暗く荒々しい側面を前景化する“New Sexism”を提唱する。その一つの例となっているのがCarolee Schneemannによるパフォーマンス・アートである。彼女は儀式的要素を取り入れながら、言語の領域を越えたところにある女性の身体の物質性を提示しているが、一方でそこには「自然=女性」という概念が家父長制により再流用されてしまう余地が残されている。Kato氏はそれを乗り越える可能性を、Ana Mendietaによる土や植物と女性の身体を組み合わせる“Land Art”に見出す。Mendietaの作品は一見すると本質主義に基づいているように映るが、一方でアイデンティティやそれを形成する境界の流動性を示しており、結果として唯一の起源へと還元することの不可能性を喚起するものとなっているのである。

三番目の発表は豊里真弓氏(札幌大学)による「見えない視線を暴くとき: *All the Powerful Invisible Things* における境界線と選択」であった。Gretchen Leglerによる表題の作品(1995)は、作者のアウトドア体験を語ったエッセイ集である。そこで語られるのは、アウトドアが文化的には徹底的にマスク

ユリな空間として規定されていること、そして女性としての Legler に向けられる男たちの視線の存在である。豊里氏によれば、こうした視線の内面化は彼女に疎外感と恐怖を与えるが、同時に自身の中にある「他者」の存在に気付かせるものともなっている。それは Legler 自身のレズビアン的感情であり、これを契機に彼女は二元論的な枠組みを拒否し、不安定な主体としての自己という視座を得る。その際彼女の身体はセクシュアリティの境界もしくは規範を逸脱するものとなる。そして同時に身体はアウトドアにおける経験を通じて、様々な他者とのつながりの可能性を感じさせる場ともなっているのである。

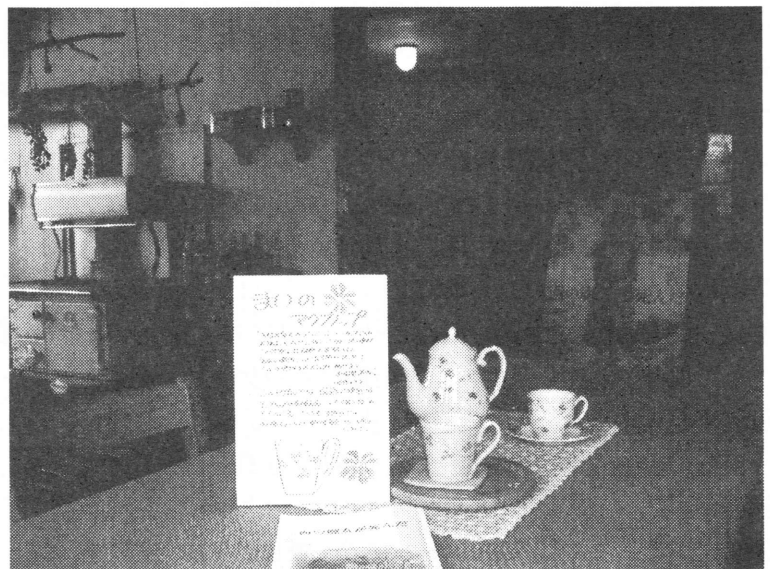
最後に玉山ともよ（総合研究大学院大学・院）氏が「雑誌『人間家族』が遺したものの、そしてこれから」と題した報告を行った。『人間家族』は1973年に創刊されたミニコミ誌であり、昨年逝去した大築準がほぼ一人で発行作業を行っていたものである。玉山氏は先住民族問題についての自身のNGOでの活動を通じて、この雑誌と出会ったという。『人間家族』が扱うテーマは多岐にわたるが、主にエコロジカルな思考に基づくオルタナティブなあり方の提示と精神文化の重視が土台となっている。現代における環境運動の先駆けでもあったともいえる同誌の主張としては、大地に根差した生き方や、読み手ひとりひとりによる思索の重要性、そして言葉を源泉とした連帯感や一体感などが挙げられる。特に同誌への寄稿者であった詩人ナナオサカキはこうした価値観を体現する代表的存在であり、発表の最後においてはナナオサカキが実際に行ったポエトリー・リーディングの動画が上映された。

「自然体験プログラム」に参加して

大野美砂（東京海洋大学）

清里での大会二日目の午後、二時間の自然体験プログラムに参加した。私たちが滞在した清泉寮を運営するキープ協会は、子どものためのキャンプや自然学校から、ウォーク、酪農体験、バード・ウォッチング、環境教育指導者養成プログラムまで、あらゆる年齢層を対象にした、様々な環境教育プログラムをしている。清泉寮を囲む豊かな自然を舞台に、参加型、自然体験型のプログラムが多数用意されている。私たちは、ガイドとともに、清泉寮から10分くらい歩いた森の中でいくつかのアクティビティをし、その後、梨木香歩の小説「西の魔女が死んだ」の映画版のロケ地となったおばあちゃんの家を見学するプログラムに参加した。

アクティビティでは、ガイドの指示のもと、制限時間内に四つ葉のクローバーを見つける競争をしたり、緑色や茶色のカードを渡されて、森の中でカードとまったく同一の色を探すゲームをしたりした。ワレモコウの名前の由来など、植物についてのガイドの説明も興味深いものだった。キープ協会のプログラムは、ガイドが言葉で何かを教えるのではなく、参加者が五感を活用して自然を楽しむことで、参加者自身もっている心や身体感覚を取り戻したり、何かの発想に至る助けをすることを目的としているらしい。私は、四つ葉のクロー



ーバーを探す中で、何も考えずに踏みつけていた地面に様々な種類の植物が生きていることに気づいたし、カードゲームでは、植物が出す緑色や茶色が多様であることに感動した。

次に、「西の魔女が死んだ」のおばあちゃんの家を見学した。小説の映画版作成に際し、製作スタッフがこの場所を見つけ、家、庭、畑など、おばあちゃんの世界を再現したそうだ。小説で、魔女のおばあちゃんが使う魔法は、魔術ではなく、生きるための知恵である。不登校になってしまった主人公の中



学生まいは、夏の間、都会とは対照的な自然の中にあるおばあちゃんの家で、自給自足的な生活をする中で、生きる知恵を身につけていく。私は、清里の森の中にあるおばあちゃんの家で時間を過ごすことで、まいが五感を通しておばあちゃんの知恵を学んでいった過程を理解できたような気がした。

東京で生活する私にとって、清里での三日間の大会の中で自然体験プログラムに参加できたことは、ひじょうに意義深いことだった。自然と向き合うことができた貴重な二時間だった。

シンポジウム「Walking: 歩行という経験」

波戸岡 景太 (明治大学)

二歳に満たない女の子が、わたしの足もとを歩いていく。母親とともにこの大会に参加した彼女が楽しげに歩きまわるここは、清里の森のそばに建てられたセミナーハウスの本館ホールだ。午後のはじめの森の散策を終えたわたしたちはあらためて席につき、そして、「Walking 歩行という経験」と題されたシンポジウムの聴衆となった。

「子どもの頃の記憶は、小路につながる」というチャトウインの言葉を、彼女のおぼつかない「歩行」に重ね合わせるようにして会をはじめた司会の管氏は、歩行という経験を、その目的性にしがって三つに分類してみせた。すなわち、狩猟や採取といった「物質」の獲得を目指した歩行と、文学や絵画や写真に経験を映しこむことを目的とした「表象」のための歩行、そして、ときに自己喪失そのものが目的化する巡礼の「精神／霊」のための歩行。シンポジウムは、現代においていささか特権化されていると思われる「表象」のための歩みのうちから、残る二つの歩行の経験のその記憶を、できるかぎりていねいに取り戻していく試みであったように思う。

それはたとえば、作家・堀江敏幸が「子午線を求めて ジャック・レダに」で試みた、パリ子午線を辿る「旅」。宇野澤氏の報告によれば、堀江の文章(それはもちろん、堀江文学特有の、経験に裏打ちされた幻想という「表象」を求める行為である)の目的とは、パリ郊外に散らばった「鑑賞されえない何か」を探すことであった。このとき作家に要求されているのは、美術館にパッケージングされた「アート鑑賞」とは正面から対立するような観察者の態度であり、宇野澤氏はそれを、歩行によってのみ完成しうる、もうひとつの鑑賞の在り方だと定義する。

一方で、尾仲浩二と村越としやの風景写真を論じた伊東氏は、両者の試みが(原風景)への到達であったことを指摘する。その土地の「ローカルカラー」よりむしろ、「どこにでもある地方」という意味での匿名性を前景化する彼らの写真。会場のスクリーンに淡く映し出されたその風景は、どこまでも静かで、まるでだれかの夢の入り口みたいだ。それを見やりながら伊東氏は、ここに立ちあがってくる作家のノスタルジアというものが、あるいは鑑賞

者たちの共感のじゃまをするのではないかと危惧してみせる。だが、彼らの〈原風景〉の探求を、たとえば巡礼のような「精神／霊」の獲得を目指した歩行の経験として捉えなおしてみるとどうだろう。かくして、匿名化された〈地方〉写真を、「歩行」という唯一無二の行為の記録として読み替える伊東氏のささやかな提案は、わたしたち聴衆の静かな共感を呼んだ。

「歩行」と一口に言うけれど、わたしたちは今、いかなる「歩行」を実践しているのだろうか？ そんな疑問に突き動かされたのか、三人目の報告者ガルシア氏は、時を遡り、かつての日本人が発明した「ナンバ歩き」を参照する。宮本武蔵の『五輪の書』にも記されたこの「歩き」は、ガルシア氏自らもたしなむという古武道の、その基礎をなす。腰を落とし、上半身と下半身のひねりを抑制する「ナンバ歩き」は、近代以降の日本に暮らす私たちの日常からは姿を消してしまった。だから現代人が悪いなどと、ガルシア氏はもちろん言いたいわけでない。そうではなくて、たとえば武道という「道」にも「歩行」があり、その経験を伝統文化の中から呼び覚ますこと。そこには身体を通じた思想の受け渡しがあり、現代によみがえるその思想は、また新たな歩行の経験を生み出していく。

そして今日もまた、どこかで誰かが歩き続けている。カトウ氏が報告する、「歩くアーティスト」とでも呼ぶべき人々の業績は、けれども「歩行」そのものが作品の本質であるため、他の芸術ジャンルのようには、なかなかどうして、その「表象」を手に入れるのは難しいようだ。ロマン主義に反発し、生きる喜びそのものを作品作りの核心においてみせるリチャード・ロングから出発し、「自然に言葉はない」という「言葉」によって逆説的に人間存在を切り出してみせるハーミッシュ・フルトンのパフォーマンスに注目するカトウ氏は、言葉による「表象」の行為が、そのままロゴやコピーとして「物質」化されていく瞬間に息をのみ、ともすれば内面への旅になってしまう「精神」への歩行をそのまま環境世界に接続していく彼らパフォーマーたちの大胆な試みこそを、現代芸術における重要な「経験」として提示してみせた。

シンポジウムが終わり、廊下のむこうで泣いていたあの子が帰ってくる。飽きもせずまた憶えたての「歩行」にいそむ彼女。それを見て、会場の大人たちは笑い、ときにヒヤリとした思いを共有し、それからもういちど、気を取り直すかのようにして笑顔にもどる。けれども、その足元のおぼつかなさとは裏腹に、好奇心とないまぜになった彼女の瞳には見えるのはたしかな自信の色だった。そう、歩き始めて間もないこの子はきっと、自らが歩けるという事実を驚きこそすれ、私たち大人のようにはまだ、そのことを疑ってみる必要などこれっぽっちもありません。



「研究発表 3:『場所をめぐる物語』としての『赤毛のアン』と「武蔵野」」

森田系太郎 (立教大学・院)

2日目午後の最後のセッションとして行われた研究発表3。参加者に疲れが見え始めたこの時間に登場したが、白百合女子大学・院の森田英津子さんと立教大学・院の佐藤有紀さんという“癒し系”のお二人だった。

森田さんのご発表は「『赤毛のアン』における森—魔法の国のアン—」というタイトルで行われた。修士論文を土台とした本発表は、モンゴメリ作『赤毛のアン』の“エコクリ分析”だったと言えるだろう。

論点は3点。第1点目は、旅や、小川、窓の持つ境界線としての役割についてだった。たとえば窓については、学校や家でアンはよく窓際に座っている。この窓は象徴的に異界との境界線の役割を果たしているのである。窓の外のプリンスエドワード島の自然・風景を眺めることで、現実の支配からアンは解放される。窓はアンにとっ

て「魔法の窓」なのである。

第2点目は、登場する森の役割である。森はアンにとって自由な場所であり、想像力を広げ、自らを解放し、心をなぐさめることができる場所となっている。自らの場所をみつけた孤児のアンは、森で孤独やマシュウの死の悲しみから解放されていく。

第3点目は、森がアンにとって脅威の対象であり、また成長のきっかけとなる場所でもある、という両義的な役割を担っていることである。アンにとって「お化けの森」は恐怖の場所であるが、一方で、森で自らの行き過ぎた想像を反省するなど、成長するきっかけとなる場所ともなっている。そのような痛みを伴う成長を通じて、アンは「大人の女性」へと変身して行く。

発表後の質疑応答では、旅や、窓、小川以外に境界線の役割を担うものはないのか、また他の「アン・シリーズ」の分析はなさっているのか、といった質問があった。

個人的には、分析の対象となった窓や小川は、境界線という二次的・副次的な役割のみならず、物語の展開を引っ張るという一次的・主役的役割を担っているのでは、という感想を抱いた。この問題については、他の「アン・シリーズ」のエコクリ分析とあわせて、引き続きご研究を続けてもらいたいところだ。

二番目の佐藤さんの発表タイトルは『『武蔵野』再考:独歩における自然観の連続性について』であった。まず著者・国木田独歩の経歴と(『武蔵野』所収の作品である)「武蔵野」の構成についての説明があった後、「武蔵野」の従来の評価についての言及があった。「武蔵野」の評価は、「近代的な文学作品である」というものと「伝統的な文学作品である」というものの真っ二つに分かれている。しかし支配的なのは前者の評価である。

「武蔵野」の文体と内容を注意深く観察してみると、その文体は言文一致体であり、内容は近代的要素と伝統的要素が混在している。その事実から佐藤さんは、「武蔵野」という作品は、近代に生きる独歩が武蔵野に残存する伝統的な自然観の世界、つまり「倂」が残存する世界をあらためて「近代的」に発見し、それを描写した作品である、と提案する。

「武蔵野」の第1章では、「倂」に実際に出会いたいという独歩の願いが描かれており、それが「武蔵野」という作品の誕生のきっかけとなった。第3、4、5章では独歩が近代的な「今」と伝統的な「倂」の双方を見出しており、佐藤さんはその点を詳細なテキスト分析を通じて炙り出した。武蔵野の光景(林・野原・農家・人々)、外国文学の引用(ツルゲーネフ・ワーズワース)、風の音、挿入される和歌、掛茶屋での独歩と婆さんとの会話などがそれに当たる。

第8、9章の分析では、武蔵野という場所を独歩がどのように捉えていたか、に焦点が当てられた。独歩にとって武蔵野は、近代の「今」でも「倂」が残る場所であり、また「大都会の生活」と「田舎の生活」の二つの異なる時間世界が共存する場所である。哲学者・内山節の『時間についての十二章』をひきながら、佐藤さんは前者を「時計の時間」、後者を「伝統の時間」と言い換える。そして迎えた結論は、発表前半で提案されたように、「武蔵野」という作品は、独歩が魅了された「倂」が近代になっても持続的に武蔵野に存在しているという事実を近代的立場から描いた作品である、というものであった。

質疑応答では、「武蔵野」に登場する和歌についての質問や、「武蔵野」の構成が示された図における「倂」の位置取りに関する質問などがあった。

私はここ数年にわたって同志の佐藤さんの研究の進展に目配りしてきたが、今回の発表ではその進展が一定のまとまりを持ってきたように感じた。

当セッションは、司会の高田賢一先生(青山学院大学)が最後に卓抜にまとめられたように、意図せずして「場所をめぐる物語」の2冊に関する発表によって構成されていた。発表者のお二人には、これからも「場所」という環境文学研究のキーワードを中心に、さらにご研究を展開していただきたい、と思っている。同じ道をともにする院生からのエールである。

報告:ワークショップ「アイヌ民族に「環境正義」を:環境文学研究における新たな場所論へ」

豊里 真弓 (札幌大学)

大会 2 日目のワークショップでは、民族文化の継承とアイヌ民族への差別をなくすことを目的に関東在住のアイヌ民族の有志によって設立された「レラの会」会長を務める長谷川修氏が、現在の日本社会におけるアイヌ民族の現状と課題について語った。司会の茅野佳子氏による紹介の後、一言一言自身の言葉を確認しながら語っているような長谷川氏の講演は、アイヌの人々が、そしてアイヌの人々とともに、「環境正義」を語れるようになるためには、日本社会がまだまだ数多くの課題を解決していかななくてはならないと改めて意識させられた意義深い内容であった。

長谷川氏はまず、近年、日本政府のアイヌ民族に対する態度に変化があったことに触れた。アイヌの人々を野卑な存在として扱い植民地化、同化政策を進めた民族差別法である「北海道旧土人保護法」が 1997 年ようやく撤廃され、また、国連による先住民族の権利宣言採択(2007 年)後、日本でも「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が衆・参両国会において採択された(2008 年 6 月)。その決議を受け、アイヌ民族に対する国としての取り組みが動き始めており、「アイヌ総合政策室」が内閣官房に設けられる(2009 年 8 月)など以前より踏み込んだ政策も取られるようになった。それは確かに前進と見えるかもしれない。

ただし、今が一番重要な場面であり、危機的な場面でもある、というのが長谷川氏の見方である。長谷川氏は、「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会報告書」(2009 年 7 月)を例に、アイヌ政策の問題点を歴史の事実認識をめぐる問題だと述べた。アイヌ民族は、日本政府に対し、アイヌ民族が先住民族であることを認めることと同時に、日本が他民族を侵略したという事実を認めることを求めているにもかかわらず、報告書は侵略という認識抜きでアイヌを先住民族とし、その文化の保護を唱えていると指摘した。

長谷川氏は、あくまで個人的な意見と前置きしたうえで、「先住民族」の定義を再確認し、日本政府に対し侵略という事実の記述を求めていくこと、単一民族国家を前提としたものではない新しい法律の制定を求めていくことが必要なのではないかと述べた。「アイヌ民族の置かれている社会的立場は歴史的に生み出されたものであり、個人の努力だけでは解決で[き]ない問題が多くある」、そして、「現在アイヌ民族が必要としているのは、単なるアイヌ文化の振興や北海道内における福祉対策のみではなく、全国規模の先住民族の生活、文化の権利を保障していく民族対策である」(講演資料より)という認識の土台として、アイヌ民族をめぐる歴史認識が重要だというのが長谷川氏の主張だったと思う。

さらに、長谷川氏は、政府の歴史認識を正すという方向性に関してはアイヌ民族の間でも様々な立場があると踏まえつつ、一方で、部落解放運動が立ち返ることのできる水平社宣言のような、アイヌにとっての運動の指標が必要なのではないかと論じた。民族の尊厳をいかに取り戻すのかの分岐点にある今こそ、権利回復とともに民族の自治宣言を目指す綱領を作成する作業がアイヌ民族には必要だと考えているのだという。

ワークショップ終了後、長谷川氏の論文を含む『《東京・イチャルパ》への道』(東京アイヌ史研究会編・発行、2007 年)にサインをいただいた。“アイヌネノアンアイヌ”“人間らしい人間”という言葉が記されていた。日本社会でアイヌの人々がそうなれるのか、はもちろん、アイヌの人々とともに人間らしい人間になれるのか—アイヌ民族以外の人々の意識と行動が問われているのだと受けとめた。



研究発表4 岩井洋氏「L.ハーンの世界感覚と近代的視覚の問題——
日本の自然観研究の観点から」を聞いて

相原 優子 (武蔵野美術大学)

2009年度 ASLE-J 全国大会の最終日である8月31日の朝、結城正美氏の司会のもと、岩井洋氏(酪農学園大学)の研究発表が行われた。岩井氏は、小泉八雲ことラフカディオ・ハーンの世界の考察を通して、ハーン独自の「世界感覚」を、「視覚」という切り口から分析された。岩井氏は、まずハーンの伝記的側面に注目し、ギリシャ人の母親(アラブの血も混ざっているとも伝えられる)とアイルランド人の父親を持つハーンの世界背景が、近代西洋の感性とは根本的に異なるハーン独自の感覚を育んだという指摘から論を始められた。

岩井氏によれば、この近代西洋の感性と世界認識方法は「遠近法作図法」に見出される。岩井氏は、パノフスキーの論を援用しつつ、ルネッサンスの遠近法と近世のカメラ・オブスキュラが近代的視覚の確立に貢献し、視覚優位的な感性を生み出すに至った経緯を辿りつつ、遠近法には、世界を自分のものにしようとする侵略的特質が内在している点をも指摘された。観察者は、架空の窓枠越しに、その中心に自己を据えて世界を眺め、そこに展開される扇状に広がる平面的な二次元の世界の中に、歪曲され押し込められた状態の現実を認識するのである。観察者の視覚世界から外れたすべては、他者化され排除され遠隔化されるのである。

視覚優位主義に侵された二次元的な世界観は、自己を他者から切り離し、両者の間には、親密な関係性は生まれない。この二次元的な世界観に反抗するかのよう、「衝立の乙女」等、ハーンの世界には二次元的な世界に押し込められたものが三次元世界へと解放されていくというモチーフがよく見受けられる。岩井氏は、平面的記号的存在が、三次元性を得たとき初めて生き生きとした実存と意味が与えられ、観察者との間に親密な関係が生まれる様子を、芥川作品「蜜柑」をも例に挙げながら解説され、この「二次元的世界」から「三次元的世界」への移行、または両者の融合が、ハーンの世界の本質を成すものであることを指摘された。

また、岩井氏は、視覚重視の世界観では排除される他者を自己の中に受け入れる方策として、「触覚」を言語化するハーン独特の手法にも言及された。「幽霊滝の伝説」では「ぐっしょり」という擬態語を使って聴覚を媒介に触覚を言語化し、「人形の墓」では、不幸な人の温もりで暖まった座に座ることによって、触覚を通して他者の不幸を自分の中に抱え込もうとするハーン自身の姿が描かれている。

死者をも含む排除された他者への深い畏敬の念とその他者との交感の意志こそ、他者を排除することによって自己をも崩壊させていく近代西洋的感性に違和感を覚え続けてきたハーンが、日本文化から抽出し、自らのものとした独特の感覚の本質に他ならない。「観る」という行為は、環境文学に於いて常に重要なテーマを提供してきた。岩井氏によるスリリングな分析を伺いながら、人間の視線に潜むイデオロギーにいち早く気づき、その解体に挑んだハーンの世界の鋭さと確かさに改めて感銘を受けた。

ラウンドテーブル2: 大学の環境教育における環境文学について

浅井 千晶 (千里金蘭大学)

大会第3日の9時40分から約1時間、ラウンドテーブル2「大学の環境教育における環境文学について」が、コーディネーター兼報告者の松岡幸司氏(信州大学)、コメンテーターの川嶋直氏(キープ協会、立教大学)、

岩政伸治氏(白百合女子大学)により開かれた。ここでは発題者3人の話の内容を簡単に振り返り、実に活発に行われたディスカッションの一部を紹介してみたい。

松岡氏は、信州大学農学部林学科在学中に、「自分の好きな自然を壊されたくない」気持ちから「文学」をメルクマールとして環境意識を理解するようになった体験を踏まえて、環境文学教育のポイントを挙げた。まず、自然・環境体験を、「知識」としてではなく、「こころの体験」としてとらえること。次に、「文学体験」を、「こころの体験」+「現実世界との関連を意識したもの」にすること。その結果、環境問題を「自分の問題」として実感できるようになり、そうなれば、おのずと現実足に足を向け、また文学を希求する契機になるという提言であった。続いて、信州大学における環境教育の現況と実践報告があった。信州大学は大学の方針として環境を重視し、「環境マインド」の育成を掲げて環境教育に力を入れているが、その内容は情報提供や理論的なものに偏りがちである。そこで、松岡氏が中心になって今年度前期に初開講したリレー式講義「世界の文学と環境」と、後期に単独で担当する「環境文学のすすめ」の概要を紹介された。ハンドアウトにはシラバスが掲載されており、参加者が各人の活動に取り入れることもできそうだ。

キープ協会の川嶋氏は25年間、環境問題の解決に向けて行動する人を育てるために、環境教育に携わってきた。知らない→知る→わかる→する(行動する)という前提は、現実には機能していない。川嶋氏はホワイトボードを巧みに利用して、カードを順に置くように、彼が実践する環境教育について話を進めた。「分かる(知識・感性)」→「分かる(言語・直接体験)」→「体験の言語化」→「プログラムの体験者による創作:俳句・詩・短文」→「指導者による言葉か適切な一節の朗読」という順である。言語化は記憶に残し、他者に伝えるためだが、言語化されないが大切なものがある点は留意しなければならない。ワークショップで朗読する本として、The Institute for Earth Education 出版の *The Earth Speaks* (1983)が紹介された。これは、Muir, Leopold から Zen の言葉まで収められていて便利であり、日本語でも同様の本があればよいと参加者を促すように発言された。

岩政氏はまず、環境活動家でない者が大学で何ができるか、部屋の中で話をする意味を問いかけ、授業で文学をテキストに扱うことの難しさという、多くの会員が直面する課題を提示した。それから、「言葉と効果」の側面からみると、「環境への負荷の少ない持続可能な社会を目指す」と「閑さや 岩にしみ入る 蟬の声」とでは、後者のほうが記憶に残る。「言葉のもつ力」に対して文学教師自身が自信をもち、レトリックへの信頼を取り戻そうではないか。想像力がなければ、「私」と環境を接続できないのだから、と踏み込んだ。

また、実際に授業で効果的だった例として、長い文学作品ではなく、ある一節を「今日の名言」として提示し、テーマを与えて考えるきっかけにする方法を紹介された。

その後は活発な意見交換になった。まず立教大学の加藤氏が、教えている日本文学科の学生が鳥の名を知らず、セミの声もわからなかったという体験を踏まえ、対象や経験に放り込むときに細かい指導と手続きが必要ではないかと発言された。これに関しては多くの応答と発言があった。「初めに体験ありき」という意見もあり、それが可能ならばありがたいが、大学での環境教育を考える際には、20歳前後になり何も知らない——セミの声を認識できず、キャンパスの樹木にも目を向けない——学生が実際相当数いるので、言葉や知識で意識を喚起することも必要だろう。方法論は異なっても、体験と知識を結ぶプロセスを促進することが教育者の役割だと考える点では共通であったと思う。各人の体験を踏まえた発言や質問はテキストの内容や価格にも及び、熱いディスカッションが続く、充実したラウンドテーブルであった。



Ecological Literature and Environmental Education :Asian Forum for Cross-cultural Dialogues

参加報告

藤村 裕子 (金沢大学医学系研究科)

2009年8月14日から7日間の日程で、Ecological Literature and Environmental Education : Asian Forum for Cross-cultural Dialogues が、中国の北京大学で開催された。このカンファレンスは、中国北京大学の Institute of World Literature and the Center for Cross-Cultural Studies、インドの Global Citizens for Sustainable Development/Vedike、ドイツの Gutenberg University of Mainz、スイスの La foundation Charles Léopold Mayer pour le progrès de l'homme (FPH)、中国の Beijing Eco Group (BEG) and Global Water Partnership の共同開催で行われた。開催目的は、“to prepare for a new enlightenment movement”と“to explore the possibility of developing a paradigmic theory of Ecologism”であった。

このカンファレンスの3つの特徴は、(1)参加者の半数以上が、アジアの様々な地域からの若手の研究者と活動家であること、(2)エコ・トーク(パート1)とエコ・フィールドワーク(パート2)からなること、(3)クロスカルチャーの視点からの、エコ・クリエイティブ・ライティングの推進をめざしていること、である。実際、5つの大陸からの参加者があり、専門分野も環境文学、エコクリティシズム、環境教育、ネイチャーライティング、環境活動、自然科学と多彩であった。

1日目の基調講演は、Scot Slovic氏(University of Nevada)の“Varieties of Environmental Nostalgia”、Nirmal Selvamony氏(The Founder-President of OSLE-India)の“II : The Oikological Human”、Xu Ming氏(Chinese Academy of Sciences)の“Global Climate Change: A New Frontier for Eco-literature”であった。Slovic氏は、「ノスタルジア」を、最も説得力のある

環境概念であり、人間と場所や地球との関係性の意味の探求や、効果的な環境活動に役立つと考え、3つの「ノスタルジア」に分類し、特定の風景に付随する“nostalgia loci”、人間の欲望や後悔に対する心理的衝動である“conditional nostalgia”、将来的な喪失を人間に予期させる“strategic nostalgia”で説明した。Selvamony氏は、“the ecological turn in theory”によって、「オイコロジカル・ヒューマン」の概念が生まれ、初期のタミルの概念である“il”が、その新しい「オイコロジカル・ヒューマン」の概念の本源であったと説明している。Ming氏は、自然科学的な視点から、世界的気候変動のソリューションにおける環境文学の新しい研究の可能性を示唆した。

ASLE-Japanからは5名が参加し、山里氏(琉球大学)が“Kenji Miyazawa and Gary Snyder: Their Vision of Humanity and the Planetary Future”、山城氏(琉球大学)が“Putting Ecocriticism in Salt Waters: Ecocritical Reading of American Sea Literature”について、大学院生では、森田氏(立教大学)が“Towards Cultivating Ecological Identity: A Proposal of Ecological Reflexivity”、Daniera Kato氏(東京工業大学)が“Walking as Experience, as Art and as Ecology: Generating Symbiosis in Contemporary Poetry and Land Art”、藤村(金沢大学)が“Group Decision-making in Japan: Focusing on Jared Diamond's *Collapse*”について発表を行った。

パート1の最終日には、今回の学会開催の経験により、中国やインドの研究者・学生・活動家が、積極的にグローバルなネットワークに参加したことを参加者全員が大いに歓迎し、さらなるネットワークの強化の実施を確認して、閉会となった。蝉の鳴き声も濁って聞こえる白いスモッグに覆われた北京で、大気汚染を実体験しながら、今後の中国やインドの環境意識の向上と、若手研究者の積極的な研究や活動に対する期待感は一層強くなった。



「生態学」講義—ネイチャーライティングの関わりから

多田 満(国立環境研究所)

生態学(生態毒性学)から化学物質の生態影響をテーマに研究を進める傍ら、2003年度から東京農工大学と東京水産(現、海洋)大学で、環境科学に関する特別講義(夏季集中)を合わせて5年間担当し、昨年からは、東洋大学生命科学部で春学期に「生態学」の講義(半年間、90分×15回、2単位、受講者数100名程度)を担当している。シラバスのテーマ・サブタイトルは、「つながり～生物とその環境の相互作用に関する科学」で、講義の目的・内容は、「人類は温暖化をはじめ様々な環境問題に直面しています。それら環境問題の解決のためには、まず「人間と自然の関係(つながり)」について考えること(「世界観 cosmology」)が求められます。この講義では、生物とその(生物的、非生物的)環境の相互作用に関する科学である生態学を学び、さらに温暖化による生物多様性の減少など、自然に対する人間の影響について応用生態学から考えます。また、生態学に関わる水俣病、法制度、ネイチャーライティングについてもお話します。」としている。そして、生態学の基礎と応用を学ぶことで「人間と自然の関係」を考え、環境問題に関する理解を深めることをその到達目標にしている。指導方法は、パワーポイントのスライドを主に、要点をまとめたプリントを配布し、講義形式で進めている。講義内容は、以前の特別講義の内容に生態学の基本を加え、毎年のスライドとプリントの内容の改変と追加をおこない、より分かりやすく新しいものに入れ替えている。講義スケジュールは以下の通りである。

講義スケジュール

- 第1講: ガイダンス
- 第2講: 生態学の基本(1)
- 第3講: 生態学の基本(2)
- 第4講: 生態学の基本(3)
- 第5講: 環境問題の古典、レイチェル・カーソン『沈黙の春』を読む
- 第6講: 農薬の河川生態系への影響
- 第7講: 水生昆虫の生態学
- 第8講: 環境ホルモンの海洋生態系への影響
- 第9講: 生態毒性学から水俣病を考える(メチル水銀の沿岸生態系への影響)
- 第10講: 人間生態学から水俣病を考える
- 第11講: 生態毒性学からみた法制度
- 第12講: 保全生態学から生物多様性を考える
- 第13講: 温暖化と生物多様性
- 第14講: ネイチャーライティングにみられる人と動物の「交感」
- 第15講: 生態学に関する新たなアプローチ

まず、生態学が扱うのは、ある地域の生態系や生物群集で、森林や土壌、河川や湖沼、沿岸や海洋など、地域固有のものであって、生態学は、「場所」の科学であり、生物とその環境の関係(相互作用)の科学であることを述べる。生態学の基本では、遺伝子と環境、生態的地位(ニッチ)と生息場所(ハビタット)、進化(適応と種分化)や二つ(光合成と化学合成)の生態系などのキーワードを取り上げ、解説をおこなっている。なお、進化については、チャールズ・ダーウィン『種の起源』から、「自然選択によって変異が集積されることで生物が変化させられる(modified: 自然選択によって適応させられた)」と説明している。

カーソンの『沈黙の春』では、1.「恐るべき力」 2. 生命の連鎖が毒の連鎖にかわる 3. さいごは人間！ 4.「別の道

へ」の4点から解説を行っている。また、化学物質の総数(アメリカ化学会への登録数)が、現在では、約2,900万種類超になっていることに関連して、「いまや、ふつうの人間なら、生命をうけたそのはじめのはじめから、化学薬品という荷物をあずかって出発し、年ごとにふえるその重荷を一生背負って歩くことになる」(『沈黙の春』34)を述べる。次に水俣病の発生を人間生態学(健康増進を個人の生活改善に限定してとらえるのではなく、社会的環境の改善をも含んで考えるために、扱う領域は物理化学的要因、経済的要因、社会文化的要因、地理的要因等、様々なレベルで健康事象に関連するあらゆる要因を扱う)から捉えて、漁業ムラ社会における水俣病患者(奇病、伝染病)に対する差別や偏見、排除から、社会文化的要因が水俣病の教訓としてもっとも重要であると解説している。また、胎児性水俣病について、胎盤を経由しておこった中毒の発見(化学物質の新しい毒性)は、水俣病が世界で最初であり、人類の未来を予見させるできごとであったことに関連して、「人類の歴史がはじまって以来、いままでだれも経験しなかった宿命を、私たちは背負われている。いまや、人間という人間は、母の胎内に宿ったときから年老いて死ぬまで、おそろしい化学薬品の呪縛のもとにある」(25)を述べる。

さらに生態学は、「生きていること」(=客観的領域)をテーマに物質を対象にしているが、エコロジーは、「生きていくこと」(=主観的領域)をテーマに精神を対象にしていることを述べる。そして、環境問題とエコロジーについて、環境問題に対処する、つまり、公害や生態系の破壊の阻止や大気汚染を減少させるには、科学技術的な対応が必要であるが、そのための策を判断するには、「人にとって自然とは」、「人と自然との関係はどうあるべきか」、それら思想的・哲学的判断が必要であることを述べ、ネイチャーライティングの1.自然に関する科学的情報(客観性)、2.自然に対する個人的反応(主観性)、3.自然に関する思想的・哲学的解釈について解説を行っている。続いて、野田研二『自然を感じるころ』の本文中のアンニー・ディラード「イタチの生き方」(89-107)を例に「交感」、「魔法の瞬間」などについて解説を行っている。

最後に「人と自然の関係(つながり)」について、物質的つながり(生命の存立基盤、有用な価値、暮らしの安全性)と精神的つながり(豊かな文化の根源)を述べ授業を終える。今後は、「個性」と「つながり」を理念とする生物多様性を考える上で、カーソンの『海辺』を、人と自然の精神的なかわりについて、カーソンの『センス・オブ・ワンダー』を教材に取り上げていきたいと考えている。

参考文献

レイチェル・カーソン『沈黙の春』新潮文庫

野田研二『自然を感じるころ ネイチャーライティング入門』ちくまプリマー新書

テリー・テンペスト・ウィリアムスのデモクラシー

岩政伸治 (白百合女子大学)

自分はヘンリー・デイヴィッド・ソロー(1817 - 1862)の影響を受けた超絶主義者だと認める現代のネイチャー・ライター、テリー・テンペスト・ウィリアムス(1955 -)の横顔は、2001年の同時多発テロ以降、むしろアメリカ民主化運動のリーダーといったほうがふさわしいかもしれない。坂本龍一編集の『非戦』にも収録された「散らばった陶器のかげら」をはじめとして、2004年にはアメリカの民主主義のあり方に正面から向き合った *The Open Space of Democracy* を発表、ペンによる発言はもとより、アメリカの民主化運動に積極的に身を投じ、「イラクで罪のない子供たちがこれ以上殺されるぐらいならむしろ逮捕されることを誇りに思う」とアリス・ウォーカーらとホワイトハウス前でイラク戦争反対のデモを強行し、逮捕される様子がユー・チューブで話題となったのは記憶に新しい。またフロリダの大学において、政治的発言をすることを恐れた大学当局が、ウィリアムスの講演を中止しようとしたことに学生が猛反発、当局は講演を結局中止したが、学生たちが自主的にウィリアムスを大学に招待した経緯がメディアで取り上げられ、彼女はリベラルな論客と

してマイケル・ムーア並みの扱いを受けるようになった。

そこで気になるのが、その関心が環境よりもむしろ政治に移ってしまったように映るウィリアムスの本意がはたしてどこにあるのかということだ。結論から申し上げると、ウィリアムスにとって、民主主義と環境問題は同一直線上に存在するテーマであり、これらのテーマを語る上で、彼女が終始一貫したある修辭的戦略を試みていることがわかる。ここではその修辭的戦略を取り上げてみようと思う。

ウィリアムスの修辭的戦略を知る上でまず思い当たるのに、先に挙げた *The Open Space of Democracy* において、民主主義を語る上で強調された Carlo Marian Martini の興味深い発言の引用がある。

The delicate game of democracy provides for a dialectic between opinions and beliefs in the hope that such exchange will expand the collective moral conscience that is the basis of orderly cohabitation.

実際このエッセイの中で、ウィリアムスは民主主義を、完成されたイデオロギーではなく、弁証法的に、前進と後退を繰り返しながら発展していく運動として描いている。ここで重要なのは、ウィリアムスがこの弁証法的アプローチを、形式としてはマルティニーニを引用しながら、その獲得の背景にソローなどの超絶主義者の存在を挙げ、その源泉を自らの自然の中での経験に求めていることである。事実、*The Open Space of Democracy* において、ウィリアムスは自らの背景に自分が生まれ育ったモルモン教の文化、伝統、価値観があることを認めた上で、大学時代、人文学の授業で学んだエマソン、ソロー、ディキンソンを通じて、自分が本当は超絶主義者であることに気づいたと告白している。このつながりを探る上で、彼女がソローの『ウォールデン』新版に寄せた序文、"Thoreau's "double vision""を見逃してはならないだろう。この序文の中で、ウィリアムスは次のように述べている。

"With one eye, he sees the object as the thing itself in all its intimate detail as he describes Walden Pond as one of "Concord's waters." And with his other eye, he sees the pond for what it inspires: myth and metaphor."

ウィリアムスがソローのこの"double vision"にヒントを得ていることは、ウィリアムスが作品の中で、自分の視点をいったん止揚することで物事の本質を見極めようとする姿勢から容易に推測できるだろう。実際『ウォールデン』にはソローのそういった物事を見極めるための姿勢が随所に書かれている。一つ挙げるとすれば、次の有名な一節あたりだろうか。

Not till we are lost, in other words not till we have lost the world, do we begin to find ourselves, and realize where we are and the infinite extent of our relations.

では実際、ウィリアムスは民主主義についてどのようにコメントしているのだろうか。彼女は民主主義を理解するために必要なものとして知識を挙げ、問いかけることからそれが始まるとしている。

...knowledge is another form of democracy, the freedom of expression that leads to empathy. It begins with our questions...

問うこと—それは私たちが物事の本質を知るための弁証法的アプローチの第一段階である。そこには異論、そして多様性を受け入れる余地が生まれる。ウィリアムスはさらに、以下の文章において、この異論そして多様性にアメリカの風景の多様性を重ね合わせることで、アメリカが異論と多様性を受け入れる余地を十分持つ資格を有することを示唆している。

In the open space of democracy there is room for dissent.

In the open space of democracy there is room for difference.

In the open space of democracy the health of the environment is seen as the wealth of our communities.

We remember that our character has been shaped by the diversity of America's landscapes and it is precisely that character that will protect it.

意見の多様性を受け入れる素養を、アメリカはその開拓者が新大陸に入植して以来、多様な物理的、社会的環境を体験することで身につけている。ウィリアムスにとって、民主主義とはアメリカという環境で生まれた一つの思想的運動でもあったのである。



ASLE-J-Grad Journal No. 7

「環境文学・批評用語集」
 一 終わりなき旅の始まり
 山本 洋平 (立教大学・院)

ホームページのコンテンツのひとつ、「環境文学・批評用語集」作成のプロジェクトがいよいよ院生組織を中心として動きだしました。先生方のサポート体制も整いつつあり、2009 年度中には第一稿があがる見込みです。昨年の Newsletter (No. 24) において、ASLE-J の HP は更新頻度やデザイン性の面で優れているからこそ、より充実した内容が期待されると書きましたが、今回はもう一歩進めて、この仕事の意義を考えてみます。

* * *

エコクリティシズムは、一過性の流行なのか、それとも、脱構築批評やジェンダー・セクシュアリティ批評のように、今後も通奏低音のように響き続ける、息の長い批評体系となりうるのか—この問いがきわめて重く感じられることがあります。“エコ”を文学に持ち込むという批評が、ある種のファッションとして映ってしまふ内的要因があるのではないかと自己批評的に考えるからです。

第一に、近年のエコクリティシズムは、人種、ジェンダー、階級、エスニシティの観点や、フェミニズムやポストコロニアリズムとの接点を積極的に探ろうとする傾向があります。第一線の批評理論を取り込むことは、ファッション的に映る面もあるかもしれませんが、環境文学の正典や批評の枠組みが常に修正・更新されることは、基本的に奨励されるべきことなのでしょう。そうは言っても、私などは単純に読書が追いつかず、ジレンマを感じるがあります。論点を追う以前に、そこで散りばめられている他の批評用語を勉強しなければなりませんし、批評対象とされている作品が初耳であったりする場合もしばしばあります。そうこうしている間にも、新しい研究書が続々と刊行されていきます。もちろん、このジレンマは、エコクリティシズムのファッション的性質というより、私の研究者としての資質の問題ではあるのですが。

第二に、大学院生であり研究者の卵であるという

立場から特に気になるのが、研究対象がマーケットブルか否かという観点です。「環境」というキーワードは追い風が吹いていると言われることもありますが、はたしてそうでしょうか。「環境問題」は、メディアによって喧伝され、企業によってコマーシャル化され、政治によって集票装置のように扱われ、総じてファッション化されてはいないでしょうか。その反動もあって、大学や学会などのアカデミズムの世界にあっては、「環境が大切なのはわかっている」というような、冷やかな視線が向けられることもしばしばある気がします。疑心暗鬼でしょうか。あるいは自分の内なる天邪鬼がそう感じさせるだけでしょうか。

しかし、本来のエコクリティシズムの思想は、決してファッションではないはずです。自然をめぐる哲学的議論や、生物多様性のひとつの存在としての人間という考えかた、現代的諸問題にあらたな視角を投げかける環境正義という観点など、より本質的な議論を促す思想であるはずです。

さて、今回の「用語集」の企画は、第一の点にたいして直接的な効果が見込まれます。初陣として ecology や sense of place などの主要語が予定されており、批評の枠組みを理解することに貢献するはずです。第二に挙げた市場価値については間接的に貢献すると思われます。エコクリティシズムをめぐる北米の ASLE の動向や保守本流のアメリカ文学界での受容度はもちろん重要ですが、ASLE が多数の国で設立されつつある昨今、北米からの“天下り”を待つような受動的な経過観察ではなく、能動的に市場を創出するということが必要であり、またそれは可能であるのでしょうか。アクセスのないところに市場は生まれません。用語集をつくり HP 上で紹介するという一連の仕事は、日本語圏におけるエコクリティシズムへの (Web 上の) アクセス創設に貢献するとおもわれます。この作業は終わることのない旅のようなものです。終わるときは批評の終着点を意味するのでしょうか。

「現代ネイチャーライターの横顔(12)」

『微笑の空』まで — 伊藤一彦歌集『微笑の空』

河野 千絵 (日本大学・非)

第十歌集『微笑の空』で2008年度の遙空賞を受賞した際、伊藤一彦(1943-)は次のように語っている。「若いころは自分を歌の世界に閉じこめ、歌が窮屈だった。今は当時に比べて歌を楽しめているかな。」(宮崎日日新聞2008年4月17日)20代から作歌を始め、40年以上の歌歴を持つ伊藤ならではの感慨であろう。真面目で慎重な彼が歌を楽しめているという心境に至った『微笑の空』。たしかに、収録されている386首の作品全般、特に自然詠の多くに解放されたような明るさや余裕が感じられる。

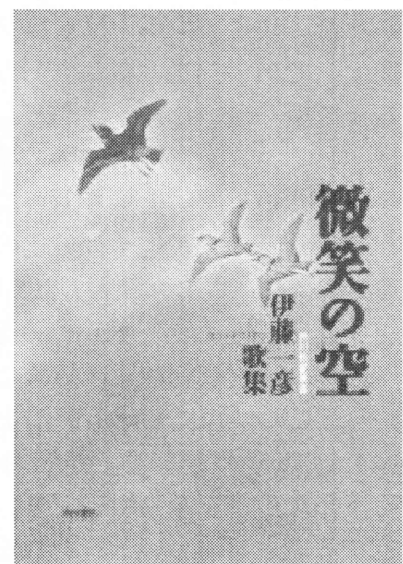
伊藤にとって自然は重要なテーマの一つである。自然詠に関する文章も多い。真摯な筆致の文章は示唆や発見に富んでおり、彼が抱えている問題意識や自然詠に対する思いの深さが伝わってくる。しばらく前の文章になるが、次の一節がとりわけ忘れがたい。「地方に自然が比較的豊かに残っているから優れた自然詠が生まれるというものでもない。むしろ地方は自然を断片的に切り取っただけの、形骸化した自然詠の墓場になりつつあるのかも知れない。」(『短歌』1991年12月号)

これは自戒の言葉でもあっただろう。東京での4年間の学生生活を除けば、伊藤一彦は生まれてからずっと宮崎で暮らしている。車を運転せず、自転車で通勤を続け、田園の緑豊かな土地に住む彼は鳥や虫、草木や花々を日常的に目にし、季節の移り変わりを肌で感じているに違いない。しかし、伊藤は平板な観察記録のような自然詠を決して詠まない。それどころか、自然を詠むことに自覚的かつ謙虚であり、自然描写と内観のせめぎ合いと言えるような緊張感のある作品を発表し続けている。

比較的若い時代の作品群には、自然描写より内観が勝っているような歌が少なくないようだ。例を挙げれば「夜の田の螢おびただし晩年をおもはぬ若さすでもたざり」(『火の橘』)「迷路のごとき生は当然 からたちの枝の稜角うつくしきかな」(『青の風土記』)の二首、いずれも歌われているのは彼自身の内省である。螢の命の絶頂の群舞は若さの美しい比喻であり、今は晩年を視野に入れることを知った作者の寂しさと若さへの愛惜が下句で語られる。二首目の「からたちの枝の稜角」は上句を受けて人生の迷路を示すと考えて良い。植物としてからたちを選んだのは、その棘が生き難さを暗示するからだろう。

実際、第一歌集『瞑鳥記』のあとがきに伊藤は、作歌とは「ことばを通じて(ママ)自己自身の内部への旅」だと記している。自然を詠みながらもそこに自我の問題が入りこんでしまうことを、彼は「自分を歌の世界に閉じこめ、歌が窮屈だった」と表現したのかもしれない。しかし、それは自然や人間についての洞察を深める道程であった。人間存在と自然の豊潤な生命力をテーマとした重厚な第五歌集『森羅の光』には、「人間の歩み入り得ぬ奥深く森の腸かこれの暗さは」「競ひつつ樹ら生き死にき極相の照葉樹林の蒼きゆふぐれ」「月光の木霊するとふ 夜のほどろ火を吹くごときはかなる音」「椎の木のめぐりは椎の音楽の鳴りある秋のしづかなる律」などの秀歌が結実している。そして『微笑の空』に描かれているのは、共に生きるものとして時に寄り添い、しかし狎れず、お互いを尊重しつつ黙礼を交わしあうような関係の自然と人間である。幾首か例を引いてみる。

朝明なる竹の林のくらがりに頭さげ入る竹ならぬわれは
フェニックスの幹の鱗に触りをり内の弱さをさぐるごとくに
限らるる環境下にのみ生を得る大型哺乳類よろしけれ



を受けずにすみそうだと、ということで終わりかねない。仮に鞆の浦が、万葉集にも詠まれず、箏曲『春の海』の原風景でもなく、『崖の上のポニョ』のモデル地でもなかったのなら、「文学」や「文化」はそれを、庇護すべきものとして認めるだろうか。

もちろんこのような問いは愚問であろう。ネイチャーライティングやエコクリティシズムや環境倫理といった概念は、まさにそのために現在注目を集めているわけなのだから。だが、より根源的にこの問題を探り直すならば、そもそも過去何十年も「実学でない」とされてきた「文学」が、同じくはっきりとしない理由で全般的に「実学」だとされてきた「法学」から、どれほどまでの距離までに現在遠ざかっているのかという、もう一つの「愚問」を問い直すことにも意味があるようにも思われる。

そもそも環境という概念は、「文学」のみならず法体系においても、いささか「後付け」的な要素が強いように考えられる。1947年に施行された日本国憲法は、環境権を明確には規程していない（皮肉にもこの憲法は、従来大陸法を継受してきたこの国に打ち込まれた英米法の楔であり、その意味でその存在そのものが「後付け」である）。また1992年のリオ宣言を受けて環境基本法が整備される以前は、少なくとも法的には、いわゆる公害問題こそが環境問題のほとんどすべてであった。さらに現在でも、予防的性格を持つ環境行政法、それを補う役割を期待される民事訴訟、行政訴訟を含めた環境に関する法システムが、その「後付け」的性質のために、従来の法体系と必ずしもうまく連動しているとは言い難いだろうし、さすがに足尾鉍毒事件の頃とは社会的状況は大きく異なるものの、近年のアスベスト問題を見ると、「手遅れ」になって初めて行政と法システムがようやく稼働するという仕組みそのものは、未だに大して進化していないとさえ言えるだろう。後から生まれてきた環境問題という鬼子に老いた法体系が悩まされているというグロテスクな妄想に、もしも多少なりとも正しい部分が存在するならば、先んじて同様の苦勞をしてきた「文学」から、何かヒントめいたものが見つかる可能性も捨てがたいようにも思える。あるいはその逆もありうるかもしれない。

日本経済新聞出版社から日経文庫シリーズとして出版されている『環境法入門』第3版は、こうした問いへの出発点の一つとして興味深いように思える。もちろん環境法関連の出版物は数多くあるし、この本の著者の一人が執筆した『自然保護法講義』（北海道大学図書刊行会）の方が、環境法の背後にあるものをより深く理解するためには、むしろ好都合なのかもしれない。だが「法律ときいて頭が痛くなる一般の方々などにも、十分に内容を理解していただけるはず」（4）とまえがきで断るだけのことであって、単に環境法への入門のみならず、ある程度は、法体系そのものを理解する入り口となれるような丁寧なつくりは、門外漢にはかなり助かるものである。

最近つくづく感じるのは、直接的体験を伴う音楽や映像作品などと違って、文学を鑑賞するためには、「文字」の向こう側を見透す強い力が必要だということだ。教室で眠そうにしている（あるいは実際に寝ている）授業受講者に対して、テキストのどこに神経が通い、体液が分泌し、血が流れているかを何とか伝えたいと思い、その度に自分の力量不足を密かに嘆く。だがこれは無味乾燥の代名詞のようにいわれる法律分野に関しても言えることで、どこに「血が通っているか」が分かった途端、その文が生き生きと見えてくる。「起訴便宜主義」などという一見よく分からない言葉の背後にどれほどの物語が広がっていることか。遠い昔、同じ教室で同じ人物が同じ受講者に教えていた頃から、おそらくこの二つの領域には本質的に「近い」何かがあるのだろう。そして未来において、互いが互いを必要とする可能性もないとはいえないのではないか。安易に学問領域を混同することは慎まなければいけないが、誤るというリスクを恐れて、越境の可能性を検討しないのはあまりに惜しい。そういえば二つの異なるものの交わりについて、かつてサミュエル・ジョンソン博士は、適切にも喝破していたのではなかったか。「結婚は多くの苦惱を生むが、独身は何の喜びも生まない」と。

—共和国の歩行者であるために

管啓次郎『本は読めないものだから心配するな』左右社、2009年。

波戸岡景太『オープンスペース・アメリカ——荒野から始まる環境表象文化論』左右社、2009年。

小谷一明(新潟県立大学)

2009年の秋、2冊の本が左右社より出版された。管啓次郎著『本は読めないものだから心配するな』と、波戸岡景太著『オープンスペース・アメリカ——荒野から始まる環境表象文化論』である。どちらも同じ時期に出版されたため、両書を一緒に読みはじめた。ジョイスの「7冊の本を毎晩2ページずつ読むのか」という警句が『本は読めない』の冒頭に載っていたからでもあり、波戸岡氏の「あとがき」で2冊はシリーズとして刊行されていたことを知ったからでもある。両書とも日記や紀行文、論文や書評などをモザイク状に入れ込むことで、多面的な読み方を許してくれる。そして2つの書物を同時に読むことは、さらに壮大なヴィジョンをもたらしてもくれる。文献学的な思索の静けさと、語りの躍動的なリズムが交錯するトピックの森に私は迷い込んでいった。出口や入口は用意されず、隠れん坊を探すように、来た道を幾度もまた戻ってしまう書店のような書物でもあった。

タイトルの大きく異なる両書ではあるが、共通する内容は少なくない。なかでも物理的な移動をとおした場所との出会い、そしてゆっくりと佇むことのなかから、旅と本の同質性を語っていく点にその共通点がある。ただし旅や読書は、自己を多様な状況に開いていく実践ではあるが、ゴールを見つけることは期待されていない。たとえば波戸岡氏のタイトルにある「オープンスペース」は、物語的には多様な上書きを施された空間である。砂漠に埋もれるT型フォードの風景は、自らのリアリティ感覚への問いかけになってしまう。また管氏の指摘するアボリジニの絵の如く、旅人は「読めない」秘儀に立ち会っている。場所は移動と混在を受け入れながら「世界」の深淵を見せ、逆説的にさらなる彷徨を用意することになるのだろうか。ともあれ語られず、見過ごされがちな場に向けて謙虚に歩み出すことに、両書の共通点がある。

波戸岡氏の『オープンスペース・アメリカ』では、ポストモダン作家トマス・ピンチョンを研究してきた波戸岡氏が、留学のためネヴァダ大学リノ校へ向かい、そこで環境文学に出会うという足取りに目を奪われる。なぜリノ校なのか。その接続は大学や ASLE 学会の紹介とともに、エドワード・アビーやドードー鳥に関連づけられるピンチョン作品の刺激的な論考によって明かされていく。現代ラダイトの怠惰や、「現実に先行するノスタルジア」による種の絶滅を書き込むピンチョンの文学史的な位置づけには瞠目させられた。そしてポストウエスタン映画の論考においては、『パリ、テキサス』や『バグダッド・カフェ』の西部を取り巻く異郷性が、ネヴァダ州ベルリンという特異な地名のゴーストタウンを歩くことと重ねあわせられ、核実験、核廃棄物の貯蔵予定地とされた西部を暗示していく。さらに『ファストフード・ネイション』、『崖の上のポニョ』といったモノログのように、パニックなしで物語る映画を通し、ローカルとグローバルの感覚のズレを指摘する本書は、環境表象論のボーダーを確実に押し広げている。

管氏の旅は、書齋の写真集による旅も含め、まさに方向を定めない歩みである。たどり着いた土地でも場所の表象・翻訳におけるズレを想う。たとえば写真家・露口啓二の『地名』を紹介しながら、言葉の地下水脈を古層までたどろうとする。またニュージーランドの作家ジャネット・フレイムの描く夏に悪臭を放つラグーンを胸に、管氏

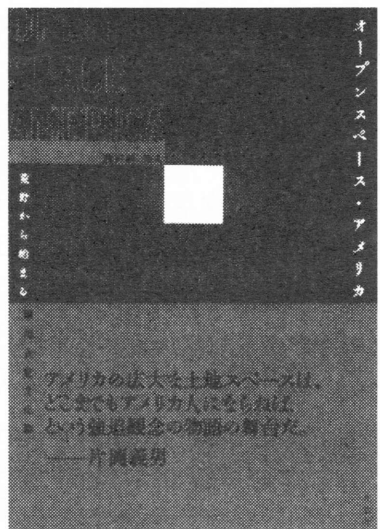
本は読めない
ものだから
心配するな



『本は読めないものだから心配するな』
管啓次郎

管 啓 次 郎

読書の實用論



は作家の生地を訪れて、付近の浜辺に足を伸ばす。そこにラグーンはなく、護岸工事を施された泥の海を見ることで、「世界」への想いを深めていく。こうしたエッセイになぜ心が引かれるのか。それは「野良作業」というフィールドワークによって生まれる重力を担いながら、体験が言葉へと翻訳される過程への気づかいのためかもしれない。ノスタルジアという言葉が生まれた背景や福沢諭吉のオランダ語体験、パドヴァの聖アントニオの異教的自然観にふれるだけで、日常的欠落感への穴埋めが期待されるからかもしれない。多和田葉子やオクタビオ・パス、手話の世界やLで始まる著者の作品紹介を読み進めながら、私は言葉の巨樹に絡め取られていった。このような言葉と大地の歩行者たちは、歩くことで出会った思い出の書店について書いている。アルバカーキのリビング・バッチ。サウスカロライナのつぶれかかった書店。現代のはかなく脆弱な日常を伝える一方で、書店の共和國的(レパブリック)特質、つまり共有物(パブリックなもの)としての言葉の世界性を自己に移植する必要が認識されている。共和国の歩行者であることを謙虚に目指したい。



事務局より

・2009年度 ASLE-Japan /文学・環境学会全国大会総会のご報告

2009年8月30日(日、午前9時～9時30分)に山梨県北杜市高根町の清泉寮本館ホールにて、2009年度総会が開かれました。まず、審議事項として、2008年度一般会計および監査報告、2009年度予算案、全国大会における都市部・地方の隔年および単独開催の方針と次年度全国大会案、『文学と環境』投稿規定の一部変更、役員の一部変更、さらに他学会との相互リンクについて担当役員より説明があり、審議を経て了承されました。続いて、2008-2009年度活動内容、会誌やニューズレターの発行(会誌は本年11月発行予定)と今後の課題、現会員数(174名)、分科会および院生組織の活動、次年度に延期となった第2回ASLE韓日合同シンポジウムの進捗状況、ASLE-Japanウェブサイトのリニューアルおよび広報活動、書誌情報についての報告がありました。なお第4回役員会において役員の一部変更が審議を経て了承されました。

2010年度 ASLE-Japan/文学・環境学会全国大会を新潟県十日町で開催します。

とき:2010年8月27日(金)～29日(日)の予定

ところ:まつだいふるさと会館(〒407-0301 新潟県十日町市松代 3816 番地 1:TEL: 025-597-3442、HP: <http://www.echigo-matsudai.com/cgi-bin/kaikan/index.cgi>)

宿泊地:まつだい芝峠温泉・雲海(〒942-1544 新潟県十日町市蓬平 11-1、TEL:025-597-3939)の予定
催しの企画予定:棚田、森の学校キョロロ、美人林の見学ツアー

研究発表、ラウンドテーブル、シンポジウムを募集します。タイトル、発表内容(800字程度)、連絡先を大会実行委員の小谷一明(新潟県立大学)までお送り下さい。

送付先:〒950-8680 新潟県新潟市東区海老ヶ瀬 471 新潟県立大学国際地域学部 小谷研究室
締切:2010年4月26日(月)

会費納入のお願い

2008年6月30日発行のNLに添えて、会費納入のお願いを致しました。会費未納の方は、至急、下記郵便口座へお振込みください。(一般 5,000 円、学生 2,000 円)

口座番号 01300-0-93821

加入者名 文学環境学会

寄贈図書

次の図書を学会に寄贈していただきました。お読みにになりたい方にはお貸ししますので、事務局までご連絡ください。なお、送料はご負担ください。

- ・エコクリティシズム研究会『エコクリティシズム・レビュー』No.2、2009.
- ・日本アメリカ文学会関西支部編『関西アメリカ文学』46号、2009.



※1ページと24ページの写真は、財団法人キープ協会にご協力いただきました。

【編集後記】

今回は、村上代表の巻頭辞を始め、清里での全国大会の報告記事が中心となりました。信州の素晴らしい環境での充実した大会の様子を生き生きとお伝えいただいた報告記事執筆者の方々に心よりお礼を申し上げます。また、学会活動や書評なども合わせ、お忙しい中ご執筆いただいた皆様に心より感謝申し上げます。若い力のエネルギーがニューズレターに寄せられた記事の数々からも溢れてくるような感慨を覚えました。(Y)



【発行】

代表 村上清敏
〒920-1192 金沢市角間町
金沢大学文学部(総合教育棟)
Tel: 076-264-5827
Fax: 076-234-4170
E-mail:
melville@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

【編集】

編集代表 横田由理
〒739-0321 広島市安芸区中野6-20-1
広島国際学院大学
E-mail:yokota@hgk.ac.jp